2011.1.9
第3種郵便物認可
朝日新聞

五線譜

ぬくもりがつながって

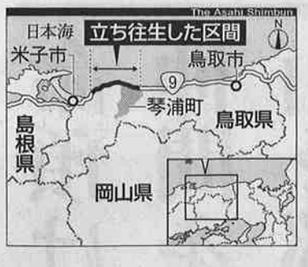
1面から続く

大みそかから元日にかけ、鳥取県琴浦町には鉛色の空から雪が横殴りに降り続いた。

国道9号は、京都市と山口県下関市を結ぶ山陰の幹線道路だ。琴浦町のあたりは片側1車線だが、高速を使わない大型トラックが普段から多い。大みそかはさらに帰省や観光の車で混んでいた。

そこを吹雪が襲った。

午後3時40分ごろ、隣町で大型タンクローリーがスリップして道をふさいだ。これをきっかけに渋滞が始まり、やがて全く動かなくなった。約25キロで車1千台が立ち往生。急な雪で、国道事務所の除雪作業も追いつかなかった。



立ち往生した車列＝1日午前4時25分、鳥取県琴浦町、西村圭史撮影

沿道にコンビニは4軒。住民は、多くが朝まで立ち往生に気づかなかった。雪で買い物にも出られず、家にこもっていたからだ。

仕事柄、祇園和康さん一家にとって看板作りはお手の物。1㍍四方の白いベニヤ板に赤いテープで「トイレ→」と書いた看板をつくり、国道脇と自宅前に立てかけた。

次々と人がやってきた。

赤ちゃんを連れた若い女性は、ミルク用のお湯が欲しいと小さなポットを持ってやってきた。「寒かったろうに」。長男の忠志さん(50)は毛布を持ち出し、お湯と一緒に手渡した。「ありがとうございます」。女性は何度も頭を下げて車に戻った。

パン屋を営む小谷裕之さん(35)は午前6時半、入っている消防団から電話で起こされた。「9号線が大変なことになっている。安否確認に出られるか」

国道に出て1台ずつ、窓をノックしてまわった。空腹をあめ玉でしのぐ子がいた。ガソリンが十分になく、暖房をつけられない車もあった。

母美登里さん(59)に電話した。「ありったけの米を炊いてくれ」。公民館から大きな釜を二つ借り、自宅にあった1俵半の米を全部炊いた。

近所の女性に役場に集まってもらっておにぎりをつくった。疲れをとってもらおうと、塩を少し多めにした。

パンを運ぶトレーで、おにぎりを配り歩いた。汗だくになった。一度着替え、夕方までかけて配り終えた。「目の前に困ってる人がいたから……。お互い様じゃけね」

国道沿いで喫茶店を営む陰山芳江さん(61)は、トイレを借りに来る人にコーヒーを振る舞った。「紙コップで味気ないけど、ちょっとでも温まって」

日が落ちてからも、首に懐中電灯を下げ、「バナナいりませんか」と声を掛けて歩いた人がいた。神戸市から帰省中。16年前、阪神大震災に遭った。マンションが半壊し、避難所の小学校で1カ月暮らした時、ボランティアに励まされた。「寒さ、空腹、不安を感じている人がいるのは、あの時と同じ。自分だけぬくぬくとはできへん」

左店の前に積もった雪をかく陰山芳江さん。「渋滞に懲りずに、また鳥取に立ち寄ってくれるといいんですけど」
右手作りの看板と祇園和康さん＝いずれも6日、琴浦町、佐々木写す

「琴浦はそんな土地柄です」と、国道沿いでまんじゅう店を営み、自らもまんじゅう1200個を配った山本浩一さん(53)は言う。

中国地方最高峰の大山と日本海に挟まれ、トビウオや二十世紀梨が特産品の自然豊かな町。難破した船が浜に漂着するたびに、地元の人が総出で船員を助けた。今も、葬儀では隣近所が料理を準備し、祭りの出し物をみんなで集まって考える。

車列に向き合い続けた1日。「ああ、そういえば今日はおせちを食べなければならない日だった」。祇園さんは夜になって思い出した。

立ち往生は2日朝に解消され、国道9号も町の暮らしも穏やかな流れを取り戻した。陰山さんの喫茶店では常連客が集まるたび、「みんな頑張ったね」などと語り合う。

祇園さんは今、渋滞に気づくのが遅れたのを、少し悔やんでいる。「昔は、雪が降ればすぐに雪かきを分担した。最近は行政に除雪車を頼むけれど、連絡を取り合っていれば、お前のところは米、お前は漬けものを用意しろ、ともっとうまく助け合えたかな」

鳥取には、9日昼すぎからまた雪か雨が降るという。

（佐々木学、下地毅）

それは元日の朝のことだった

日本海を望む鳥取県琴浦町で看板工房を営む祇園和康さん(79)は、いつもと同じ午前6時前に目を覚ました。夜明け前、窓の外はまだ暗い。大みそかから降り続いた雪は、もう腰の高さまで積もっていた。

「随分、降ったもんだ」。近くの米子市では1日午前5時に観測史上最高の89センチの積雪を記録した。雪の多い山陰でも、海沿いでこんなに積もるのは初めてだ。身震いをして石油ストーブに火を入れた、その時だった。

トントントン。入り口のサッシをたたく音がする。開けると、50歳くらいの女性が真っ青な顔で立っていた。

「すみませんが、トイレを貸してもらえませんか」

聞けば、路地の50㍍ほど先にある国道9号で、車が立ち往生しているという。ポツリとともった明かりを見つけ、すがる思いでひざ上までの雪の中を訪ねてきたのだ。

「こらぁ大変だ」

祇園さんは、見たこともない長い車列に驚いた。仕事場のトイレを、みんなに使ってもらおう。人口1万9千人の琴浦町の人たちにとって、いつもと違うお正月が始まった。

34面「五線譜」に続く